# 「怨霊退治屋（ごーすとばすたー）」

水上羚（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「怨霊退治屋（ごーすとばすたー）」

【Ｎコード】
Ｎ４８５４Ｑ

【作者名】
水上羚（みなかみれい）

【あらすじ】
怨霊退治や悩める幽霊の悩みを解決して生計を立てる雅兎（マサト）とそのたぶん守護霊の秋兎（アキト）。
これは、ゴーストバスターの二人組みと二人組みが間借りするお屋敷の住人たちとのグロテスク描写アリのどたばたコメディ＆ホラーもどきなお話。

## 第一怨霊（前書き）

微妙に話や設定が重かったり、メタ発言、メタ設定、中二病発言、中二病設定があります。
それでは、だいいちおんりやうのはじまりです。

## 第一怨霊

「ひぃいいい！い、命だけは、命だけはぁ・・・」

破れて血のシミが目立つ、ボロボロのもとは純白であったであろうウェディングドレス。

ちぎれてしまい、薄布がほとんど残っていない純白のヴェール。

白い花で統一されたはずのブーケは廃墟となった教会のすみで萎れ、

毟られ、無残な姿をさらしている。美しい教会でそんな姿の、

幸せの絶頂を迎えるはずだった花嫁の怨霊は突然現れた青年と少年に退治され、

消滅する寸前となっていた。

「あのさぁ、雅兎（まさと）。ぼく、なんか虚しくなってきたよ」

風化の激しいまだかろうじて原形をとどめている臙脂色の布張りの長いすに座り、

白に茶色いぶちのはいったウサギのかたちのパーカーと

ベージュのズボンに赤いスニーカーをはき、左目の黒い眼帯がめだつ１０歳程度の少年が

渦巻き型のピンクと白の棒付きアメをなめながら

身の丈の半分ほどもある大きな鋏(はさみ)を
床に突き刺して青年と花嫁になるはずだった怨霊の戦いの感想を簡潔に述べた。
よくみると少年の体がうっすら透けていた。
「何だ？秋兎(アキト)。せっかく早く仕事のかたがつきそうなんだぜ。
終わったらパーっといこうじゃないか」
ジンと呼ばれた、前髪の左側の一筋だけ黒い髪の毛を持った明るい茶髪の
切れ長の瞳の青年があきらかに改造のあとが目立つもとはオートマチックの
黒い拳銃を花嫁の怨霊に向けながら返事をする。

## 第一怨霊（後書き）

微妙にリンクというか、すべての作品が多層平行世界で人外キャラが異世界を行き来するため、繋がっていて設定もほぼ同一なんです。

## 第二怨霊

「マサト、死亡＆敗北フラグたっているよ？それでもいいの？」

なげやりに言葉を言い終えてからアキトと呼ばれた少年が

なめ終わったアメの棒をぷっと吐き捨ててから退屈そうに長いすに倒れこむ。

「うるせぇ。そんなフラグへし折ってやる」

ぶっきらぼうに言ってからジンはトドメとばかりに

最後に拳銃で花嫁の怨霊の額を撃ちぬいた。

乾いた銃声が廃墟の教会から消えると割れたステンドグラスから雪が舞い降り始めた。

「・・・終わったな」

怨霊が消えると教会のなまぬるく重苦しい嫌な空気が身を刺すような冷たい冬の空気に変わった。空気がガラリと変わると強い北風が教会を一掃する。

「そうだね」

ふたりとも数秒のあいだ達成感に身をゆだねたが、

マサトに変化が現れた。

「ぶうぇっしょくん！あーやっぱ寒むいわココ。コートどこおいたっけ？」

マサトが戦闘開始直前に脱ぎ捨てたコートを捜すが見つからなかった。

マサトたちがいる遥か後方、出口の大きな扉付近の長いすのほうから声がした。

「ここにあるよ」

## 第三怨霊

すぐさま二人が振り向くとそこには、艶やかな藍色の髪の毛をうなじのところで

オレンジのゴムでひとつにまとめて、紺色のスーツに黒色のマントにシルクハットに

銀縁の伊達メガネの１４～１６歳くらいの少女がビルの３階ぐらいの高さの吹き抜けの

廃墟の教会のビルの二階部分に相当する高さのところで浮いていた。

浮いている少女が黒いロングコートをヒラヒラと左右に振って遊んでいる。

それから少女はコートを取り替えそうとするマサトからふよふよと漂いながら逃げ回る。

無邪気な笑い声をあげながら逃げ回るその姿は鬼ごっこで遊ぶ子供のようだった。

約１０分間走り回り、マサトが少女を追い掛け回しているとある瞬間フッと少女の姿が消えた。

アキトはそのやりとりをポケットからだした新しい棒つきアメをなめながらみていた。

しばらくすると追いかけっこ飽きたのか宙を浮いていた少女はもっていたコートを投げ捨てた。

そしてふんわりと地面に着地していたずらっ子のような笑みでこういった。

## 第四怨霊

「どう？うまくいった？」

マサトはあきれた表情でため息をつきつつ、コートを羽織った。

「お前のせいで雰囲気ぶち壊しだよ、桜花。毎回雰囲気ぶち壊すのはどうしてだ？」

拳銃をしまいながらマサト本人にとっては長い間疑問となっていることを問いかけてみた。

「それは・・・・・気分だよ。このあいだも言ったでしょ、ボクは気まぐれだって」

桜花は、さも当然というふうに笑いながら答えた。

答えを聞くとカツ、カツと乾いた革靴の足音を響かせてマサトは無言では

ずれかけて高い耳障りな音をたてる教会の出入り口の扉を開けた。

そして、振り返りながら一度だけイタズラ好きな子供のような桜花をみた。

「やっぱアンタと話していると疲れるわ。もう帰るぜ」

桜花はその言葉を聴くととたんにしゅんとして朽ちかけた長いすに

腰を下ろしながら少しだけ言葉を返した。

「おもしろくないね。でも、まぁいいや」

そうつぶやいて桜花は紺色のスーツの胸ポケットから銅製の小さい鍵をとりだし、

右手でパキッと粉々に壊した。壊した瞬間に教会のなかに風が吹いて長いすでくつろいでいた桜花を包んだ。

数秒後に風がなくなるとそこには誰もいなくなっていた。

空虚な廃墟の教会にはだれもおらず、

壊れたステンドグラスから真冬の冷たい風と雪が入っていった。

## 第五怨霊（前書き）

且つダウほうこくといふものをはじめてみました

## 第五怨霊

古びてはいるが、落ち着いたデザインとシックで
シンメトリなーインテリアの洋館のエントランスホールの大きな扉
が開かれ、
先ほどは激しい戦闘をしていたとは思えないすがすがしい顔をした
マサトとアキトが
声をそろえて『ただいま』と言った。
「おかえりなさい」
柔らかい優しい声がして二人は振り返るとエントランスホールの
二回へと上がる螺旋階段のようなゆるいカーブのついた階段の先の
廊下には
赤い車椅子に乗った黒いワンピースの少女かいた。
二人に無事家に帰ってこれた喜びから笑みがこぼれた。
そんな二人に優しく微笑みかけながら、
一階へ降りようと考えたのか階段の近くに近寄った。
あわててマサトは少女を抱え、アキトは車椅子を下におろした。

少女を車椅子に乗せると少女は礼を言った。

「ありがとう」

そう言ってから挨拶としてアキトとマサトのほほに軽くキスをした。

「すみません、真夜(マヤ)さん。間借りの家賃も払えないのにここに住まわせてもらって」

ふふふっと笑ってやんわりと赤い車椅子の少女マヤは謙遜して否定する。

「いいのよ。大家だって道楽で始めたようなものだし。

にぎやかで寂しくないから。それに、

ここにはじめてきたときにもう家賃代わりの対価は貰っているのよ。

それじゃ、いかなきゃいけないからまたね」

マヤはゆっくりと自分で車椅子を動かし、

ホールの扉の反対側にある大きな鏡の中にするりと入っていった。

## 第六怨霊（前書き）

かつだうほうこくといふものをはじめてみました。

よるはねめのやうできもちのよいじかんたいです。

ただ、しかうりゃくのていかはまぬがれることができないのがざんねんです。

## 第六怨霊

それを呆然と見つめていたマサトはしばらくの間、
理解できずにマヤの入っていった鏡を見つめていた。
そんなマサトにあきれてアキトは正人の袖を引っ張り愚痴をこぼす。
「前に言っていたのに。ここは人外魔境(じんがいまきょう)の
屋敷で魔女とか亡霊が住んでいるって」
「わかっているけど、やっぱりこの屋敷の構造が理解できない」
ゆるく首を振り、理解に悩むマサトの頭上、
豪華な蝋燭が数え切れないほどついているシャンデリアが
キィ、キィと音を立てて揺れていた。二人がそれに気がついて上を
見るとそこには、
5歳か6歳ほどの女の子がシャンデリアをブランコのように揺らし
て遊んでいた。
その女の子もアキトと同じように体が透けて見えていた。
「マサトくん、ひさしぶりの仕事はどうだった?楽しかった?」

話しかけた直後に女の子がふわりと着地すると虚ろな目、
目の下にクマ、青白い顔の病人のような顔でマサトを見つめた。
「ライさん、何やってたんすか？さっきまで」
そう聞かれると幽霊の女の子、
ライはクスクスと無邪気で不気味な笑い声を上げてから問いの答えを返す。
「闇に葬り去られても無問題（もうまんたい）な人の体を乗っ取って遊んでいたけど、
飽きちゃったからシャンデリアで遊んでいたの。
怨霊を五百年ぐらい続けてたらできるようになってたから試してみたくて」
こともなげにとんでもないことを言いながら、
答えてすぐに無邪気な笑い声を残して突風のようにホールの右側の扉を
すり抜けて消えていった。やれやれ、騒がしくて、
個性的な住人だと思いながらマサトはホールの右側の談話室と
打刻された銅のプレートのかかった扉を開けた。

## 第六怨霊（後書き）

ほんたうに、しゃうせつをかくときはねめのやうなおだやかなきもちになれます。

## 第七怨霊（前書き）

だいなおんりゃうです。
旧仮名遣ひもどきはきにしないでくださひ。

# 第七怨霊

扉を開けると、

パチパチと暖炉で薪の爆ぜる音がするふかふかの緋色の絨毯がしかれたシンプルな机と

ソファーのみが置かれた大部屋があり、そこには教会でマサトのコートを持って逃げ回って

イタズラした紺色のスーツの少女桜花と

黒髪と平凡そうな顔で黒い学生服のような服を着た青年と少年の間のような男子が

暖炉側から見て右側の同じソファーに座って話していた。

その反対側のソファーでは先ほど少し話をした幽霊の女の子のライがにこにこと笑いながら桜花に話しかけようとしていた。

机をはさんだ暖炉の真向かいのソファーには黒いサングラスをかけた白っぽいグレーのパーカーをきた優しげな青年が

青年のひざの上に座った7、8歳の女の子の話を聞いていた。

談話室で各自のんびりと思い思いに過ごしている

この屋敷の住人たちは穏やかな時間を過ごしていた。

寒い屋内から帰ってきた二人は温まろうと暖炉のそばのライの隣に座った。

座ってすぐにアキトはポケットから新しい水色の渦巻状の棒つきアメをなめはじめた。

しばらくしてマサトの体が温まった頃に談話室に一つしかない扉がゆっくりと開かれた。

## 第七怨霊（後書き）

とにかく、前書きにはつっこまないでください。

## キャラ紹介　その１

桜花（おうか）
１４～１６歳くらい　女　１５８ｃｍくらい
２２～２４歳くらいに変装すると１６４ｃｍくらい　体重は不明だがかなり軽い
艶やかな藍色の髪の毛をうなじのところでオレンジのゴムでひとつにまとめている。
紺色のスーツに黒色のマントにシルクハットに銀縁の伊達メガネ。
クール系で沈着冷静。何事に関しても傍観者の立場にいる。
普段はポーカーフェイスで他人をからかうのが好き。口調は常に敬語や丁寧語の時や、
子供っぽい口調などその時による。
左耳に青い薔薇のピアス。（サファイア）と佐倉の紋様の刻まれた銀の懐中時計をいつも持ち歩く。
顔は小さめで、少年のようにも少女のようにも見えるが、やや高めの声で女と判別できる。
基本的には、きまぐれ。まるですべてを知っているかのように振る舞い、時には大人な女性、
ある時は少年のように、あるときは深窓の姫のように振る舞い、
その場の雰囲気や話す人によって態度などをころころ変えて人をからかう。
胸はないが、詰め物をしたり、男装をしたりとそのときの気分により服装も変わる。
メガネは銀縁だったり、ふちなしだったり、似通ったタイプの伊達メガネを複数所持している。
気に入ったか、心を許している人のみ名前で呼ぶ。本人も気がついていない癖。
作者メモ　作者ですら、桜花の行動に驚かされることがある。愛す

べきアブノーマル。

真夜（マヤ）
１５３ｃｍ、かなり軽い。
どこかにあり、どこにもない館の主。赤いリボンをカチューシャのようにつけて、
装飾の類の一切ない黒いワンピースに白いハイソックスに小さな赤い靴。
首には頭のリボンと同じ材質の赤いリボンをチョーカーのようにつけている。
赤い車椅子に座り、生気のない眼で物事を見つめて淡々と生きている。
口数も少なく、必要最低限の言葉のみで考えていることは不明。一人称は私、二人称はあなた。

## 第八怨霊

「あれ？皆さんおそろいでしたか」

扉が開かれて、ふらりとやってきたのは目の下のくまの濃い顔の

ふちのないメガネをかけたよれよれでしわだらけの白衣の二十代後半から

三十代前半に見える青年だった。

「慈愛（じあい）さん。おひさしぶりです」

ふと物思いにふけていたマサトは顔を上げてやってきた青年に挨拶した。

談話室にいた住人たちはそれぞれのやり方、それぞれの言い方で挨拶した。

挨拶に応えてからすっと慈愛がマサトの隣に座って話しかけた。

「マサト君、怪我しているよ。後で診察室においで」

いつの間にか腕に怪我をしていたことにマサトは

気がつくとなんでもないとばかりにさっと怪我を隠す。

「傷が化膿しないうちに診てもらえば？」

鈴を転がすようなかわいらしい声女の子の声がしたかと思うと

さきほど出会った半透明の女の子、

ライがイタズラのつもりでマサトと話していた慈愛に背後から抱きつきにかかる。

慈愛は条件反射で振り払うと白衣のうちポケットから

古びたアンティークのカメラを取り出し、フラッシュをたいた。

ライは撮影されるたびに身をよじり苦しそうにする。

負けじと、ライも慈愛の体をゆさぶり攻撃する。

しばらくそのやりとりを繰り返すとライが顔を覆って倒れて消えていった。

## 第八怨霊（後書き）

知ってる人は知っている、ニヤリ

## 第九怨霊

「何していたの？」

先ほどまで桜花と楽しそうに語らっていた黒髪黒目の青年がマサトたちに話しかける。

「あ、結理（ゆいり）さんおひさしぶりです。

またライさんと慈愛さんが某ホラーゲームごっこしているだけですよ」

とマサトがいつもだといわんばかりにそっけない返事をしたので結理は

それ以上は詮索はしなかった。

「しかも某キャラの何もかもをマネして。

服装から、登場方法からいろいろ・・・ね。凝っているじゃない、ライ」

ゆらゆらと消えていったはずのライが立ち上がるとライが笑った。

「家に帰ると間借り仲間が某ホラーゲームのマネをしてきます」

ぼそっとやや青ざめた嫌そうな顔でアキトがつぶやいた。

騒げるだけ騒いだら三々五々間借りしている住人は部屋に戻っていった。

あるものはふらりと風のように、あるものはゆっくりと、あるものはまだ騒ぎながら。

マサトとアキトはパタンと樫の木で作られた部屋のドアを閉めた。

閉めて一息ついてから、アキトが疲れたというような表情をしてアメをまたなめはじめた。

なめはじめたのをしばらくみつめるとマサトはアキトに近づいてから、

「うさぎちゅわぁ〜〜〜〜ん！愛してるぅ〜〜！」

がばっとアキトに抱きつくと頬ずりし始めた。

すぐさま、アキトはじたばたして何とか逃れる。

「うぜぇんだよ！！触るんじゃねぇ、この変態が！！」

アキトの渾身の怒りも虚しく、こうして一日が終わった。

「あぁん。うさぎちゃんからの愛が痛いっ。でもそこがいい！」

## 第九怨霊（後書き）

雅兎（まさと）くんは変態です。（キリッ

# 第十怨霊

明けて翌朝、屋敷の住人たちは朝食のためにドアの真鍮のプレートに会議室兼、
食堂と打刻された部屋に向かっていた。
食堂内の大きな楕円形の木のテーブルの指定席に着席するとすでに朝食のために
卓上は整えられていた。
白いテーブルクロスがテーブルにかかり、
等間隔に花を摘み取って飾った小さな籠が置かれていて、
銀のカトラリーが白い皿と鎮座している。
楕円形のテーブルの細長くとがっている両端の部分の部屋の一番奥の一番暖炉に近い席のほうには皿などは準備されていても、イスがなかった。
そこはこの人ではないものがすむ摩訶不思議な屋敷の主のいつもの場所だからである。

# 第十一怨霊

少しだけ他の住人よりも先に食堂に到着したマサトは自分の定位置の扉に一番近い主の

真夜(まや)の正反対の席に座ろうとしたときにひとの気配を感じ取りイスにかけようとした

右手を戻す。そして気配のほうに顔を向けて挨拶した。

「おはようございます、マキさん。今日も早いですね」

マサトが声をかけたほうにはすらりとした長身の色白で

華奢そうな深緑の髪と目をした紳士のような若い青年がテーブルクロスなどの

セッティングをしていた。

セッティングをしていた青年がマサトのほうを向いてにこやかに話しかける。

「優兎(マサト)さん、おはようございます。今日は珍しく早いですね。どうかしましたか？」

「あ、いや。昨日はふざけてしまって相方を怒らせてしまったものですから・・・・」

「そうですか。それは大変でしたね」

マキと呼ばれた青年とののんびりとした何の変哲もない普通の穏やかな会話を楽しんでいると

ぞくぞくと他の住人たちがやってきた。

# 第十二怨霊

自分の席に座り、料理がくるまでの暇つぶしとして隣席のひととの雑談に興じている面々を

ぼーっと眺めていた。

ふと斜め向かいの幽霊少女のライの席に、

ライに似た二十代半ばの成人女性が座っていることに気がついた。

「ライちゃんの生身ってそんな姿だったんだ。はじめてみた」

「この姿はあまり好きじゃないからあまりしなんだけど、たまにはいいかもって思えて」

「幽体離脱したあとの体ってどうするんすか？」

「知りたい？」

「知りたいです」

「じゃあ、あとで私の部屋に来て頂戴」

「あの悪趣味な拷問部屋まがいの部屋にですか？」

子供の姿の幽霊のもとが成人女性とは知らず、興味がわいたのでついていくことにした。

# 第十三怨霊

「ボクはいかないから。雅兎(まさと)、いってらっしゃい」

自信の部屋に戻り、くつろいでいるといきなり部屋を浮遊していた秋兎(あきと)が

雅兎(まさと)にとって思いもよらない言葉で穏やかな空気は一変した。

雅兎は秋兎と常に一緒であることが日常の一部分で当然のことであったからである。

「どうしてだ?」

衝撃のあまりにソファーに深く身を沈めて、いつもの覇気をなくした声になった。

「嫌な予感しかしないから」

「・・・そうか。こういうときのお前の勘はよく当たるからなぁ~。

でも、行くだけ行ってみるさ」

「そう」

「何があっても、必ず帰ってくるから待ってろ」

「約束は守ってよね」

行くことに決意した。

## 第最終怨霊

ーー優兎視点ーー　日記から

そのひ、俺は人生最悪の日となったことを恨んだ。

拷問が趣味と言い張る人物の部屋に行ってしまったからだ。

危うく拷問道具の餌食となるところだった。恐ろしい。

大の男が涙を流しながら恐怖に震える様子が部屋のぬしによって

間借り仲間にばらされたことは言うまでもない。

人間不信に陥りそうになった。

迫り来る拷問道具、トラップの山から命からがら逃げると自室に逃げ帰って鍵を急いでかけた。

もうあんなところにいくもんか。

こうして、俺達のとんでもない非日常のような日常がすぎていく。

「優兎（まさと）ー！早く！」

「今行くから待ってくれ！」

おわり

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4854q/

---

「怨霊退治屋（ごーすとばすたー）」

2011年6月25日14時36分発行